



1981年(昭和56年)
6月号(No. 432)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価一部 150円

目次

昭和56年度日本山岳会通常総会
新会長に佐々保雄氏就任……………(1)

自然保護
再び日高中央横断道路計画と問題点
(渡辺正臣)……………(2)

東西南北……………(4)
モーズヘッドのこと
深田記念公園と記念碑
尾瀬十句
図書紹介……………(4)
「アルプスを描いた画家たち」
お知らせ……………(5)
日本山岳会昭和55年度事業報告……………(5)
" 昭和56年度事業計画(案)……………(6)
" 昭和56年度予算書(案)……………(9)
" 昭和55年度決算書……………(10)

ルーム日誌……………(7)
会員住所・住居表示変更……………(7)~(11)
復活・新入会員……………(8)
カット/山本朋三郎・松本真太郎

▶日本山岳会事務取扱時間

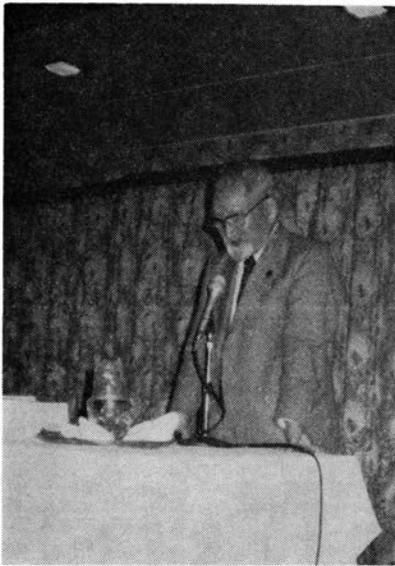
月、火、木、土曜 10時~20時
水、金曜 13時~20時
日曜・祭日は休み
▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時~20時

昭和五十六年度日本山岳会通常総会
新会長に佐々保雄氏就任

――支部の強化を――

日本山岳会の昭和五十六年度通常総会は五月十五日(金)午後六時より東京都千代田区九段北四ノ二ノ二十五の私学会館四階会議室で開かれた。会員総数三六四九名

のうち委任一五〇〇名を含め出席会員数一六三一名となり総会が成立すると中川常務理事が確認。西堀栄三郎会長が議長となつて議事は進行された。



就任の挨拶をする佐々新会長
撮影 小倉厚会員

まず折井副会長から会務報告があり、若い頃席を持ちながら仕事等の関係で不本意に会を退き、今回復活された古い会員を歓迎できる喜びと、物故された古参会員から若い会員までの二十四名に対する哀惜の情が述べられ、全員しはし黙祷する(物故会員 植松清一、金成寛治、中島正文、額田 敏、村上金吾、柳 宏子、松本節子、野村俊男、大林 胖、宇部 明、鈴木祐幸、島 宏、若林祐二郎、西山正二、富山周治、トーマス・ルゴ、川村博道、浜田一馬、室越昌男、井田英彦、吉阪隆正、磯野三郎、滝浪善一、竹中昇)。

次いで第一議案の昭和五十五年度事業報告および収支決算、財産目録については渡辺副会長より説明があった。事業報告としてはオデル氏の来日、ソ連のモナルテイスキー氏の歓迎、科学研究委員会主催の諸研究会、全国支部の諸活動、そして昨年度と今年度にまた

がったチョモランマ登山や婦人部のケダルトナート登山が特記されること、また収支決算の収入の部では新入会員の入金や会員の会費納入率が予想を越えたこと、チョモランマ登山隊の保険金三〇〇万円ほどがそのまま支出にまわっていることなどの説明があった。支出の部では予算と決算は総額においてほぼバランスしているが、海外諸関係費の超過は中国登山協会の人々の接待に要したもので、この関係は予備費を流用する形となっていること、総合収支は一五〇万円ほどの黒字となり財産目録で預金の増加となっているが、これはルーム購入時の借入金返済か、今後増加するであろう山研の補修費に見合う積立金とするか考える余地のあるところのだが、減価

償却費を計上していないため出た余剰金とも考えられるので一概に黒字といいかねる部分であること、また図書出版研究基金については山岳図書約六千冊という会の重要な財産を管理するカード化をはかるための費用案出や、このところ増加しているビデオテープやフィルムのむずかしい管理方法を検討し、それを実行するフィルム委員会発足の対象として考えられるもの等説明があった。

この説明のあと小原監事が立つて帳簿や証ひょう類の突き合せの結果これらが正確・妥当に処理されていることを鳴原監事ともども確認した旨監査報告がなされ、質疑応答ののち満場一致で承認された。

第二議案の昭和五十六年度事業計画案はふたたび渡辺副会長により説明がなされ、特に向こう五年間、中国登山協会と交渉の結果天山山脈の登山を学生部中心としておこなうことになったこと、および学生部中心となるための便宜を受けながらも、必ずしも学生だけでなくある程度幅をもたせる活動となること、ならびに図書の管理充実が図書委員会で積極的に図ら

山をきれいに
「三」は持ち帰ろう

留守番電話(電話番号231-六六五九)

償却費を計上していないため出た余剰金とも考えられるので一概に黒字といいかねる部分であること、また図書出版研究基金については山岳図書約六千冊という会の重要な財産を管理するカード化をはかるための費用案出や、このところ増加しているビデオテープやフィルムのむずかしい管理方法を検討し、それを実行するフィルム委員会発足の対象として考えられるもの等説明があった。

れていることが説明された。また昭和五十六年度の予算案については財政を会費だけにたよらず、会員のボランティア的貢献を受けつつ事業収入を多少とも増加させようと配慮したこと、支出面では人件費、郵便料金を含む通信費の自然増があること、および外国からの来客については不透明部分があるため、この予算を多くに立てず予備費で補うようにしたことなどの説明がなされ、総じて新年度の予算規模は諸費値上がりを考慮した緊縮形の予算となったと説明された。第二議案も全員拍手をもって承認された。(関係資料は5頁以下に掲載)

第三議案の理事および評議員の交代は定款第十四条、第十五条および細則第七条、第八条によっておこなわれたと前置きがあり、新任、再任役員の氏名が一人一人西堀議長によって読みあげられた

△会長 佐々保雄(新任)、副会長 渡辺兵力(再任)、田口二郎(新任)、理事 川上 隆、中村純二、小倉 厚、高橋 聡、菅沢豊蔵、岡沢祐吉、高本信子(以上再任)、赤松功也、大倉昌身、田村俊介、神崎忠男、河村憲二、松家 晋、西村政晃、伊丹紹泰、水野 勉、鈴木雄二(以上新任)、監事 鳴原啓佑(再任)、太田 敬(新任)、評議員 佐藤テル、望月達夫、朝比奈英三、木下是雄、村木潤次郎、大塚博美、河野幾雄、高遠 宏(以

上再任)、小原勝郎、折井健一、辰沼広吉、柴田均二、岸田権二、山田二郎、松丸秀夫、西沢健一、飯野 亨、蒲生明登、細川沙多子、片岡 博(以上新任)。この件も異議なく承認された。

第四議案の除籍対象者六十名については、なお一年間説得慰留に つとめたのち年度末に処理することを付帯事項にして承認し、総会議事録の署名人浜野吉生氏と荒野康子氏を指名し議事一切を審議終了とした。

西堀前会長と佐々新会長からはそれぞれ別掲のような退任および就任の挨拶があつて、総会終了後、例年どおりの懇親会が別室で行われ、午後八時お開きとなつた。

私(西堀前会長退任挨拶へ要約)の援助により無事任期を終えさせていただけ感謝にたえない。これも日本山岳会が長い間に積み上げた発展の基礎の上で果せたものと思う。私は努力したつもりだったが、思っただけのことはできなかった。しかし新しく佐々保雄氏を会長に迎えることができ幸運であった。永年会員であり名誉会員でもあり、私よりも早く木暮理太郎さんや沼井鉄太郎さんの知己を得て日本山岳会員となり、北海道で活躍しておられた。しかし本来は東大の地質出身で、現在は青函

自然保護 再び

日高中央横断 道路計画と問題点

渡辺 正臣

「山」四二二号紙上に、私の載せた「日高中央横断道路計画とその問題点」に対して、北海道在住の当山岳会員一原有徳氏から、早速「ゆがめられた保護運動」と題して「山」四三一号に御意見を寄せ頂いたことを有難いと思つている。それは従来も自然保護委員会の関係者が、自然保護に関する意見を「山」にたびたび載せているが、それに対する反応はきわめて少なく、会員の自然保護に対する熱意が那辺にあるのか、気にしている矢先であつたからだ。

「山」四二二号紙上の私の記述は、同ページの自然保護委員会の、「日高中央横断道路建設に対する要望書」に対して補足説明の気持ちから私見を述べたものであり、紙面数字の関係から現地の現況についてなどは記載しなかったが、一原氏が「何も知らないで書いていたのではいか」と御指摘されたので、反論や弁解という意味からではなく、追加説明やら私の考えを再度述べさせて貰うことにする。

私が「山」四二二号の七頁に記した道路計画とは、北海道開発局がすでにあきらかにしている計画の概要をそのまま発表したもので、一原氏の言を待つまでもなく、現況とは確かに違つている。将来使用されるであろう林道は計画書に記されているようなナナシの沢に沿った林道ではない。その後の林道の延長や、トンネルを穿たれるであろう地点(一七三七と一八二六の二ピークの間)の地下を穿って、西側はコイボクシュシビチャリ川の六六〇の地点、東側は札内川七ノ沢の六八〇の地点を直線で結ぶも

の)については、もちろん未決定のものであるが、その地点で間違いなからうと考へていた。トンネルの位置は当初の計画書に記載されている「ヤオロマップ岳の北側」では大ざっぱすぎで、前述した地点、すなわちヤオロマップ岳の北約六キロの地点を通るであろうと承知していた。なお一原氏のいわれる一八二三の峰は一八二六の峰の間違ひではないだろうか。

しかし公式の文書には、上記のような状況は、何一つ説明されていないので、「山」紙面では、そういった詳細な地点の記載は、紙面の都合もあり、その際不必要と思ひ、あえて記さなかったのである。

なお一原氏は、これらと全然関係ないと思われるシュンベツ川ポイントンナップ川の林道の乗越の話を書かれてはいるが、不用意に読むと、その乗越にこんどのトンネルが穿たれるのかと解釈し混乱してしまふ。

原生自然の保護をしようというのは、例えその林野が有用の森林資源であるとか、ないとかには関係はない。この場合は、この日高山脈一帯には、広大な面積の原始的な自然が残つていて、その保全、保護をすべきだと言つているのであり、本会の提出した要望書(「山」四二二号)にも、はっきり述べられてはいるように、早く国定公園に指定して、その保護を急ぐべきなのである。

自然破壊は、その付近の景観にマッチした立派な舗装道路ができれば破壊の進行は防げようと、一原氏は言われるが、そんなものではない。その後のごみや排気ガスによる被害は目を覆うものがある。道に面した樹木の傷み方は、車で走り抜けているときには気がつかないことが多く、歩いて見ると驚く場合が多い。一原氏は欧州アルプスの道路は自然と調和し

トンネル建設の学問的指導をされる立場にあり、山も日本はもとより海外の山々にも行かれ、最近ではネパールヒマラヤにも足を伸ばされています。(会報欄号に佐々氏がメラ峰八四七六に登頂したとありましたが、これは第一キャンプ五二四〇までの誤りで、それから一カ月後、エベレスト街道をトレックした折にカラタパール八五四五に立った、と旧制二高同窓会誌「高志」にご自身で書かれていた旨、横田敦一会員より知らせがありました。この場をかりて訂正させて頂きます。(編集)

これからも日本山岳会の発展に大きく寄与されることは確かで、今まで北海道支部におられた関係から、支部に対しては深い理解を持っておいでだ。次期会長を誰にするかはかなり重要な気にかかることであり、この点を理解され引き受けていただけたことは、私としても幸運だった。また東京を留守にしていた新会長を補佐するに好適な田口二郎会員に副会長をひき受けて頂けたことも、各理事、監事およびお付役の評議員の方々が決まったことも有難いことだった。

これからの山登りは頂上に立つということだけでなく、山を幅広く考える方向にむかうと思うが、こういった点からも新会長を中心とした日本山岳会の新組織が増々発展してゆくことを信じて疑わない。長い間どうも有難うございま

した。

(佐々新会長就任挨拶(要約))

私は大学を出るとすぐ北海道へ行き、約四十年間北大に籍を置いていた。このため北海道の一部の人とおつき合っていたにすぎないし、多くのすぐれた先輩たちを思うと、今回のようなことになるのは恐怖だといった感じすら受けた。お話があった時は適任ではないと考えていたのだが断り方が足りなかったと思っている。ただ会員総数の半分近くを占める日本山岳会の支部会員のことを考えると、長い間北海道の支部にいたので、地方の方々の心情が多少は理解できるように思う。日本山岳会の中で各支部が占める位置は大きいと思う。このような点で、その裾野である支部の強化をはかるという点について、私は多少もお手伝いできると考える。山登りに関しても新しい方向が現れつつある。山登りというより山として、自然としての山を見る。自然保護というものもそういったところから出てくると思うが、こういった流れの中で、学生など山岳会の若い人々を助け、日本山岳会を盛り立てて参りたい。

日本山岳会に入る時、私は入会を薦めてくれた木暮さんや沼井さんから、これからは君たち若い人が日本山岳会をやっていくのだと言われた。その責めを地方にいた

ていると言われたが、私もそう思っていた。確かにすばらしい道路であるが、計画当初には計算できなかったであろう車の交通量の増加により、最近はこちらと排気ガスによる自然破壊が進みあちこちで問題になっている。

私は先年、スイス・アルプスのグリムゼルバスを車で走り抜け、美しい景観に酔っていたが、突如数台前を走っていたバスが横になり、おかげで二時間ほど道路閉鎖になってしまった。そのところは、たまたま樹林地帯であったので、その時間を利用して歩いて見たが、車道沿いの自然林の樹木が非常に多く立ち枯れているのを知った。説明を聞くに排気ガスの影響が多分にあると聞いていた。車で走っていただけ



南ア・上河内岳/山本朋三郎

では気がつかないことだと気付き、見てくれの調和だけを云々してはいけなないと、その時に強く思った。

また次ぎ次ぎに造り急ぐ、スイスの湖畔を走る、都市間を結ぶアウトバーンが、ややもすると景観と調和しておらず、国民のひんしゅくをかっていけるのも事実である。

我々は一原氏が言われたように林野行政を云

々することはできないが、知らない間に林道が延びていることは事実であり、と言って我々はそれを絶え間なく追うことは難しい。しかし気がついたものについては十分チェックをし、自然破壊が進行している場合は遅滞なく注意すべきであろう。ここ日高山脈の場合も、できてしまった林道については、もう仕方がないとは考えずに、できるだけ早く元の状態に戻させる一方、それ以上破壊が進まないよう努力するべきである。

もし中央横断道路が承認され、開発道路として建設される場合は、いまの林道は早晚道路幅が広げられようし、一原氏の言われるような、トンネルとその前後のわずかな道路だけの工事では終らないのは明白である。したがってその破壊は、工事廃土の処理もまじえて、さらに増大するのである。

ここで一言しておきたいことは、私の属している日本山岳会自然保護委員会は、山男のエゴでも何でも反対しているのではない。国民生活や地域の人々の生活のことも十分考えにいられている。ただこの道路は、この道をはさんで北と南に、既に開通している国道日勝道路と、建設が始められた開発道道浦河―大樹線があり、昭和三十年頃に地元町村から要望された時とは、大いに様子が変わっている。一年の半分を雪のため交通途絶されるこの道路が、かけがえのない原始の大自然を破壊してまで建設される必要があるのだろうか。早く国定公園に指定し、併せてこの道路計画を断念させるべきだと思っている。

このような考え方の立場を理解していただき、一原氏のような北海道在住の有力な会員の協力が得られることを深く期待してやまない。

(自然保護委員会)

自然保護

ため今日まで果せなかったが、この年になって先輩方の意志を継ぐことになり、これも何かのめぐり合せかと思っている。幸い両副会



モーズヘッドのこと

島田 巽

英国の初期エヴェレスト、H・T・モーズヘッドの子息にめぐり会われた前田浩氏の「ダージリンの一夜」(四三〇号)を興味ふかく読んだ。同じホテルでガルトゥエン・ノルブと歓談した二十余年前のことを、私もなつかしく想起したが、たまたまエヴェレストの文献を読み返している折だったので、二、三ちよっと気になる点があった。ごく簡単に記して前田氏の参考に供したい。

長とも協力を約束され、理事、監事、評議員の方々も日本山岳会のためにやって下さるものと信じ、会員皆さんのご協力で日本山岳会

点。たしかに彼も東側からラクパ・ラに登ったが、人夫に故障者が続出したため、ベリー隊長らとともに引返している。東ロンブック氷河源頭を経てノース・コルへ到達したのは、マロリー、パロック、ウィラーの三人であった。東ロンブック氷河を溯行するルートは、測量はされたが、当時まだ未確認のままだった。

一、一九二二年の第二次遠征で、モーズヘッドが登攀メンバーから外されたという、子息の不満げな話。遠征隊報告によると、モーズヘッドは二五〇〇〇のC・Vで凍傷のため登高を断念している。測量担当とともに有力な登攀メンバーでありながら、歩行困難となるほどの凍傷のため、一足さきにロングスタッフに付きそわわってダージリンへ向ったもので、登攀隊員からはずされたという話は、当たらないと思う。

を盛り立てて参りたいと思う。よろしくお願いいたします。(記録・岡沢祐吉)

有名なので、それとの混同から生じた誤解ではなからうか。ダージリンに現存する生家を訪れたという子息の話はほほえましいが、なにか不満げなのが気になるので、周知のことだろうが一筆しておく次第。

深田記念公園と記念碑

山下 久男

深田久弥さんが山梨県茅ヶ岳(一七〇四)の山頂近くで急逝されて満十年になる。韮崎市や市の観光協会、それに山梨県の山の愛好者達が満十年を記念して、山麓の穂坂町柳平に深田記念公園を設け、深田さんの碑を建立された。

その除幕式が四月二十一日午前十時からあるというので、東京から深田森太郎、沢二の両君とその家族二人。石川県からは深田さんの姉上、松田八重さん、弟の深田弥之介ご夫妻、深田さんから俳句の指導をうけた市原聖城子、森田一水、加賀市山岳会長の田辺弥寿雄ご夫妻に私の八名が参加した。



図書 紹介

アルプスを描いた 画家たち 近藤 等著

古代ギリシア彫刻から現代の前後絵画に至る西欧美術の歴史は、ある程度まで私たちの常識とさえなっている。その美術史の中に山岳絵画という一項を立ててみたらどういふことになるだろうか。この興味深いテーマに取り組んで、山岳と美術の関係を歴史的に叙述したのが、近藤等氏の「アルプスを描いた画家たち」である。かつてアルプスと文学の関係の歴史をつづった著者が、今ここに絵画を主題として、ヨーロッパ山岳文化史をさらに拡大してみた。

カラー十点を含めて百三十を超えてる絵画で目をたのませながら時代ごとの世界観や自然観を反映して絵画の中の山岳もまた多様に変化してきたさまを学ぶがよい。西欧美術史にうとい人でも、山岳に関心をもってさえいれば、この一書によって絵画史の輪郭を学ぶことができる。もとより絵画好きの人々にとって、本書は、時代の順を追って配列された山岳絵

画美術館をめぐり歩きたいにひたらせてくれる。ギリシア・ローマの美術に山はないも同然であった。中世からルネサンスにかけての時期に、ようやく山の姿が遠い背景に描かれはじめた。多かれ少なかれ象徴的な意味を負わされて、山々は絵画のモチーフとなった。人間の自由な接近を拒むがゆえに恐怖され、醜悪なものときえ感じられがちであったアルプスの山々も、十八世紀に至ってにわかに関しきと美しさをおあわせものと思われるようになり、山々は遠景から近景へとせり出してきた。十八世紀後半に山や氷河が独立のテーマとなるに至った。このような流れにのって山岳絵画の歴史をたどれば、私たちは否応なしに西欧人の精神文化史にも思いをはせることができるのであって、近藤氏の著書は私たちにきわめて多くの豊かな情報を



提供してくれる。目下のところ類書がないだけに、貴重な文献として推奨しなければならぬ。ところで本書は、スイス山岳会創立百年の記念出版物である「絵画の中の山」(原著はドイツ語)なしには生まれえなかつた。著者

この日はやや風があったが、よく晴れ、新設の公園の丘からは、富士をはじめ南アルプスの連峰が望まれた。碑は縦横それぞれおよそ二層で丘の上の南よりに建てられ、茅ヶ岳山頂と向いあい、碑面には、

百の頂に
百の喜びあり

深田久弥

と三行に彫られていた。台石は山梨県の安山岩という。式は午前十時十分、関係者参列のもとに開始、葦崎市長内藤登氏の式辞、観光協会長や日本山岳会副会長折井健一氏らの祝辞があった。私は深田さんの出身地の加賀市の市長山下力氏のメッセージを、ありし日の深田

さんの面影を思い浮べつつ、高らかに読みあげた。つづいて、十年前深田さんら一行と行をともしし茅ヶ岳に登られた、甲府市の山村正光氏から深田さん急逝前後の模様が発表された。参列者一同とともに私も拝聴した。式の前日の夜、山村さんからは深田さんがこの山に登山された折携行の、手帳の内容の一部もきいた。それには犬ふぐりの二句がかかれていた。今朝もここに来る途上で私もみかけた。こういう道端の花を深田さんはこよなく愛されていた。碑前で私達は記念撮影をした。

尾瀬十句

小林碧郎

夜鷹鳴く森へあふるる沼の霧
郭公のあひ呼ぶ霧に朝ともす
岩つばめこそぞり鳴く齋明易し
筒鳥や夜明けの岳が霧に立つ
毛氈若蜻蛉地獄も日の盛り
湿原の板登うつて雷雨来ぬ
夕虹や黄菅咲く野に膝濡れて
わたすげや池塘の底も夕映えて
滝落ちて月光はしる柵の闇
河鹿鳴く銀山平雲とちて

柳、紫金草、都わすれ、

東西南北

の山に登山された折携行の、手帳の内容の一部もきいた。それには犬ふぐりの二句がかかれていた。今朝もここに来る途上で私もみかけた。こういう道端の花を深田さんはこよなく愛されていた。碑前で私達は記念撮影をした。

深田さんがこの山で永眠されて以来、この山の登山者が年々急増しているとも聞いた。また浦和市に「深田クラブ」というのが出来、深田さんの名著となっている「日本百名山」を次々登頂し、クラブ員の七名ばかりはすでにその「百名山」を登ったという話もきいた。

四年前の昭和五十二年四月三日深田さんの七回忌を記念して、志げ子夫人らの御遺族、金沢からの四名、大聖寺からの四名など計十三名で追悼登山を行った。終焉の場に持参の黄水仙、スノードロップ、菊の花、椿、雪柳、紫金草、都わすれ、

ストック(白色)の花を供えた。金沢の千歳も、それにアンパンも。

その時、頂上の櫓の上で大聖寺の市原聖城子君は謡曲「鞍馬」を朗々と謡ったのであった。その時の志げ子夫人も昭和五十三年三月他界された。しかし深田さんを慕い、その著作に親しみ、日本の山々は勿論、ヒマラヤに、シルクロードに出かける人々が年々増加しているのは何とも喜ばしいことである。私もその一人で、四月十日から十七日まで、中央アジアのサマルカンド方面に出かけた次第である。

第一回 日本登山医学研究会

お知らせ

標記研究会(会長 北 博正 東京医科歯科大学名誉教授)を七月五日(日)九時~十七時に慈恵医大高木会館講堂で行います。多数ご参加下さい。

- 一、研究発表 登山医学に関すること全般(シンポジウム、特別講演、一般演題)
 - 一、演題締切 六月末日必着
 - 一、演題申込先 医療委員会
 - 一、会費 三千元(含む抄録代)
 - 一、懇親会 七月四日(土)午後六時よりルームにて
- (医療委員会 大森薫雄・山本良三 赤松功也)

自身が参考文献の筆頭に同書のフランス語版をあげている。この先駆的な書物によって著者が大きな刺激と知的興奮を感じたことは、同書によって同じ感慨をいだいた私には十分に理解できる。著者はこれを基礎にしてさらに自力で山岳絵画を探し、日本における山岳絵画にも言及して東西の山岳観の比較をおこなうなど、いろいろと工夫をかさねて有意義な付加価値を加えている。本書とくに前半部分がスイス山岳会の出版物によりかかりがちで、その抄訳とみられる段落が見られるのは、基本文献に対する筆者の敬意の表現であると理解しておこう。

ドイツ・ロマン派の画家フリードリヒがヴァッツマンを描いたとあるが、この画家はベルヒテスガールデンに行ったわけではなく、弟子のスケッチを利用して、自分の想像の力でイメージをふくらませたものである。写生と想像の関連はロマン派絵画の本質にかかわる問題であって、こうした点にこそ深い考察が披瀝されていてほしい、と私は感じた。

もう一つ、地名・人名の表記に一層の慎重を期されたいと思う。ライチエンパツハ(正しくはライヒェンバハ)、ストーバハ(シュエタウバハ)、ペランゾナ(ペリントナー)等々がその例である。ターナーが描いた湖として「ルツェルン湖」と「四州湖」の

名が並んでいるが、これは同一の湖の異名である。これは多分参考文献そのものに地理的認識の不足があったのであろう。

以上の若干の苦言は、どのみち先駆的業績につきものの批判であって、本書の本質的な価値自体をそこなうものではありえない。山と絵をとともに好む人たちの良き友となってくれるにちがいない書物であるという基本的認識をもった上での贅言な苦言にすぎない。

東京新聞出版局、昭和五十五年第一版、A5版、二五三頁 (宮下啓三)



日本山岳会

昭和55年度 事業報告

(55・4・31) 756・3・31)

1、登山の指導と奨励に必要な集会、講習会および展覧会の開催

- (1) 集会
- 5月16日 支部長会議 (本会)
- 5月23・24日 尾瀬視察山行 (尾瀬)
- 6月1日 ウェストン祭 (信濃支部担当上高地)
- 3日 第389回小集会

今年もまた上高地山研で逢いましょう！

- 山菜勉強会 (本会) 7/8日 第390回小集會 (南会津二岐山)
- 山菜山行 (本会) 7月22日 ガルワル・ヒマラヤ登山隊報告会 (本会)
- 8月22日 第392回小集會 (私学会館)
- 28日 第393回小集會 (オデル氏来日記念「セブション」)
- 29日 第394回小集會 (オデル氏来日記念「映画と講演の夕べ」)
- 9月11日 第395回小集會 (オデル氏送別会)
- 10月4・5日 紅葉の北八ヶ岳を登る会 (八ヶ岳)
- 10/12日 第396回小集會 (スケッチ山行 講師 清野 恒)
- 21日 第397回小集會 (スケッチ山行 批評会)
- 23日 婦人懇談会「ネパール・ニュージラントの話」
- 25日 第35回山岳図書交換会 (会津那須山群)
- 11月2・3日 婦人懇談会山行 (南会津寮明山)
- 8・9日 青年懇談会「丹沢研究会」
- 9日 学生部マランマ大会 (皇居周辺)
- 23・24日 第398回小集會 (会津那須山群)

- 12月6日 年次晩餐会 (京王プラザホテル)
- 12月6日 支部長会議 (本会)
- 19日 忘年会 (本会)
- 1月15/18日 第400回小集會 (本会)
- 2月7・8日 青年懇談会 (八方尾根)
- 26日 婦人懇談会 (「シヤンパンマの話」)
- 3月5日 西独プリンクマン氏 外務省招客として来日当会訪問 (本会)
- 10日 第12回山岳図書を語る夕べ「イタリアの山の本」
- 24日 第401回小集會 (小西政経氏講演会)
- 3月28日 第402回小集會 (7月9日新入会員のためのオリエンテーション)
- 3月28日 第406回小集會 (ニュージラント山岳会 歓迎パーティー)
- 30日 第9回山岳史懇談会「大正期の積雪期登山」
- 6月20日 研究会 (「森林の土壌の話」)
- 26日 第5回講演会 (「山岳と科学」)
- 7月18日 第6回講演会 (「チョモランマ隊の科学調査」)

- 講師 渡辺兵力、横山宏太郎、齋藤淳生 (本会)
- 25日 懇談会 (「カメラの使い方」)
- 講師 渡辺正臣 (平ヶ岳について)
- 講師 中村純一 (本会)
- 8月10・11日 平ヶ岳高山植物探察行 (平ヶ岳)
- 10月16日 懇談会 (「燃料と燃焼の話」)
- 講師 小西奎一 (本会)
- 11月14日 話題提供 (「空中地形写真」)
- 講師 大森弘一郎 (本会)
- 30日 北アルプス空中撮影行 (北アルプス上空)
- 12月1日 遭難対策委員会、学生部共催 雪崩研究会、講師 金坂一郎、若林隆三 (本会)
- 11日 話題提供「スキートの滑降回転性能と機械的特性」
- 講師 松丸秀夫 (本会)
- 12月/3月 婦人懇談会、高所登山委員会共催「女性のための高所登山セミナー」(3回)
- 講師 金坂一郎、川上隆、松永敏郎、雨宮 節、高橋通子、神崎忠男 (本会)
- 3月17日 西堀会長を囲む座談会「スキートの科学と思い出」 (本会)
- 3月19/22日 指導委員会、遭難対策委員会、高所登山委員会、



- 越後支部共催第26回山スキー講習会、雪崩についての講習 (金坂一郎) (二王子岳)
- 12月6日 この一本展 (京王プラザホテル)
- (5) 支部活動
 - 全国にある19支部ではそれぞれ集会、研究会、講演会、山行(海外登山活動も含む)等が活発に行われた。
 - 5月23・24日 支部創立20周年記念山行 九重山群 (東九州支部)
 - 7月27日 懇親山行 (熊本支部)
 - 阿蘇高岳北面 (熊本支部)
 - 7月/8月 支部創立20周年記念ネパール国際親善派遣 (東海支部)
 - 10月22/24日 現地支部長会議 丹波篠山 (関西支部)
 - 27/28日 懇親山行 北太郎「オボコベ」(宮城支部)
 - 11月8・9日 第23回紅葉会 大平部落東海自然歩道 (静岡支部)
- 2、登山施設の改善その他登山のための適切な事業
 - 上高地山岳研究所を5月/11月まで閉所、山研委員会、集会委員会、青年懇談会、婦人懇談会、高所登山委員会、図書委員会、自然保護委員会、海外連絡委員会、科学研究委員会による研究会を開催
 - 3、山岳遭難の予防とその対策に関する企画及び指導
 - 各大学山岳部による夏山診療所開設 (7月/8月)
 - (槍ヶ岳、五色沼、唐松、三俣山、白馬岳、合戦小屋、立山、尾瀬)
- 4、自然保護活動の推進
 - 環境庁との連携を密にし国立公園における山岳地の自然保護への協力 日高縦貫道路の反対活動

- 1、登山の指導要助に必要な集会、研究会、講習会の開催
 - (イ) 集会
 - ・小集會(報告会、講習会、シンポジウム)
 - ・本会、その他 20回
 - ・ウェストン祭 6月6日/7日
 - ・上高地 6月6日/7日
 - ・山岳図書交換会 10月
- 2、昭和三十五年 事業計画(案)
- 3、登山の指導要助に必要な集会、研究会、講習会の開催
- 4、自然保護活動の推進
- 5、海外登山の企画および海外との交流
- 6、機関誌などの刊行
 - 「山岳」75号発行
 - 「山日記」昭和56年版編集
 - 「山日記」昭和56年版編集
- 7、目的を同じくする外国山岳会等との情報交換
 - 30ヶ国60の団体と情報交換
 - 日中合同登山推進のため中国団体関係者と情報交換
- 8、その他

- ・年次晩餐会 京王プラザホテル 12月5日
- ・山岳史懇談会 2月
- ・山岳図書語る夕 3月
- ・来日外国登山家との交歓
- (a) 研究会
- ・高所登山研究会
- ・科学研究会
- (b) 展覧会
- ・この一本展
- (c) 講演会
- ・登山、山岳の科学研究に関する講演会
- 2、登山施設の改善、その他登山のため適切な事業
- ・上高地山岳研究所開所(5月3日)11月初旬)
- 3、山岳遭難の予防とその対策に関する企画および指導 7月/8月
- ・夏山診療所開設
- (槍ヶ岳、五色沼、唐松、三俣山、白馬岳、合戦小屋、尾瀬、立山)
- ・雪崩シンポジウムの開催
- ・雪氷登山技術講習会の開催 11月
- ・山岳スキー講習会の開催 3月
- 4、自然保護活動の推進
- ・各所での自然保護活動の推進
- ・北海道日高横断道路に関する自然保護活動
- 5、海外登山の企画及び海外との交流
- ・中国天山山脈(ボゴダ山群)の登山
- ・韓国の山岳会との登山交流 (青年懇談会)
- ・インド女性登山家来日 7月 (婦人懇談会)
- ・ソ連山岳連盟との交流
- ・ドイツ山岳連盟との交流
- 6、機関紙などの刊行
- ・「山岳」76年発行
- ・会報「山」第43号、44号発行
- ・「山日記」昭和57年版 編集

- 7、国内および国外山岳団体との連絡および情報交換
 - ・日・ネ協会の事業に対する協力(登山)
 - ・中国登山界との交流促進
 - 8、フィルム委員会(仮称)設立
 - 9、山名委員会設立
 - 10、山岳図書研究、図書室の運営管理
 - 11、その他
 - ・その他目的を達成するために必要な事業を行う。
- ルーム日誌**
 (56年4月)
- 6日(月) 理事会
 - 8日(水) 図書委員会
 - 9日(木) 評議員会
 - 10日(金) 山研委員会、青年懇談会
 - 15日(水) 三水会
 - 17日(金) 科学研究委員会
 - 24日(金) 青年懇談会
 - 28日(火) 婦人懇談会
 - 30日(木) 韓国山岳会歓迎会
- 今月の来室者 349名
 会員移動(4月)
 退会
 一三五九 吉田 礼二
 七五〇六 伊藤 義彦
 七七五七 内藤 新一郎
 八四三四 ロバート・スタージェルス
 八二二九 炉辺会
 物故
 五三一二 小崎 司郎(54・3 届55・4)
 (11P.へ続く)

写真集 飯豊連峰 山と花

日本山岳会越後支部会員 小荒井実著



■序文 今西錦司 ■監修 藤島 玄

四季折々に見る飯豊の山々は、一体何を語ってくれるのか?
 本書は、会津・喜多方在住の著者がこの山の全容と、そこに彩る花たちを見事にとらえた豪華な写真集です。

▼山名入り航空写真や、見開き四ページの折込写真など、迫力ある山岳写真集
 ▼特産種イイデリンドウをはじめ、豊富な高山植物の生態や形態を見事に活写
 ▼雪形による農事暦など、民間信仰、民俗学に及ぶ著者独自の解説もユニーク

A4判変型・総128頁・上製函入り
 内容見本、はがきで小社宣伝部まで
 6月23日発行
 定価15000円

原色日本産 ■絵・太田洋愛 ■解説・富樫 誠
ツツジ・シヤクナゲ大図譜
 好評発売中・内容見本呈、定価38000円
 伊藤浩司著・発売中・見本呈、定価43000円

北海道の高山植物と山草

誠文堂新光社 東京神田錦町1の5
 03(292)1211

昭和 56 年度 予算書 (案)

自昭和 56 年 4 月 1 日
至昭和 57 年 3 月 31 日

(単位 円)

一般会計 収入の部

勘定科目		予算額	前年度 予算額	増減 (△)
大科目	中科目			
基本財産 運用収入		600,000	600,000	
	基本財産利息収入	600,000	600,000	
入会金収入		2,250,000	2,250,000	
	入会金収入	2,250,000	2,250,000	
会費収入		22,500,000	22,500,000	
	会費収入	22,500,000	22,500,000	
	終身会費収入			
事業収入		5,060,000	4,930,000	130,000
	広告料収入	1,300,000	1,250,000	50,000
	山日記印税収入	560,000	380,000	180,000
	その他印税収入	0	500,000	△ 500,000
	刊行物売上収入	500,000	500,000	
	その他事業収入	1,000,000	600,000	400,000
	山研使用料収入	1,700,000	1,700,000	
寄付金収入				
	寄付金収入			
雑収入		1,100,000	900,000	200,000
	受取利息	800,000	600,000	200,000
	雑収入	300,000	300,000	
小計		31,510,000	31,180,000	330,000
前期繰越 収支差額		15,991,793	14,408,195	1,583,598
	前期繰越収支差額	15,991,793	14,408,195	1,583,598
合計		47,501,793	45,588,195	1,913,598

一般会計 支出の部

(単位 円)

勘定科目		予算額	前年度 予算額	増減 (△)
大科目	中科目			
運営管理費		10,770,000	10,144,000	626,000
	給料手当	4,750,000	4,400,000	350,000
	文具費	120,000	120,000	
	印刷費	600,000	600,000	
	旅費交通費	500,000	500,000	
	通信運搬費	1,000,000	900,000	100,000
	火災保険料	70,000	70,000	
	管繕費	100,000	100,000	
	諸税会費	550,000	550,000	
	光熱水料費	150,000	150,000	
	電話料	300,000	250,000	50,000
	会議費	100,000	100,000	
	交際費	200,000	200,000	
	什器備品費	250,000	100,000	150,000
	振替手数料	170,000	170,000	
	支部運営費	600,000	600,000	
	福利厚生費	100,000	100,000	
	事務所管理費	600,000	600,000	
	その他管理費	360,000	384,000	△ 24,000
	雑費	250,000	250,000	
事業費		18,320,000	16,760,000	1,560,000
	出版費	7,590,000	7,140,000	450,000
	図書費	600,000	550,000	50,000
	調査研究費	510,000	810,000	△ 300,000
	指導費	1,060,000	860,000	200,000
	支部関係費	1,000,000	900,000	100,000
	海外諸関係費	100,000	100,000	
	山研運営費	1,860,000	2,000,000	△ 140,000
	その他事業費	800,000	600,000	200,000
	印刷費	600,000	600,000	
	通信運搬費	3,800,000	2,800,000	1,000,000
	光熱水料費	400,000	400,000	
借入金 返済支出		5,822,000	5,822,000	
	借入金返済支出	5,822,000	5,822,000	
予備費		1,500,000	1,500,000	
	予備費	1,500,000	1,500,000	
小計		36,412,000	34,226,000	2,186,000
次期繰越 収支差額		11,089,793	11,362,195	△ 272,402
	次期繰越収支差額	11,089,793	11,362,195	△ 272,402
合計		47,501,793	45,588,195	1,913,598

財 産 目 録

昭和 56 年 3 月 31 日現在

(資産の部)

1. 基本財産

種 類	預 入 先	金 額
貸付信託	三井信託銀行本店	2,380,000円
"	日本信託銀行本店	420,000
"	中央信託銀行本店	5,200,000
合 計		8,000,000

2. 現金および預貯金

種 類	預 入 先	金 額
現 金		88,333円
振替貯金	東京地方貯金局	1,126,543
普通預金	協和銀行市ヶ谷支店	3,885,864
"	三菱銀行 "	409,166
"	三和銀行本郷支店	58,411
"	東京銀行本店	30,891
"	三井信託銀行新宿西口支店	13,169
"	日本信託銀行本店	3,879
"	中央信託銀行 "	27,553
定期預金	協和銀行市ヶ谷支店	11,000,000
普通預金	協和銀行市ヶ谷支店 (図書出版研究基金)	821,546
定期預金	" (")	8,000,000
"	" (会員遺贈基金)	1,107,700
"	" (終身会費積立金退職給与積立金)	5,630,000
合 計		32,203,055

3. 建物および土地

A 事務所および図書室	金 額
場所 東京都千代田区四番町 5 番 4	72,720,170円
構造 鉄筋コンクリート造、陸屋根、地下 1 階付 5 階建 (事務所) 区分所有建物 1 階部分 103.32 m ² 宅地持分 1124.56 m ² ×339/10,000	
(図書室) 区分所有建物 1 階部分 55.22 m ² 宅地持分 1124.56 m ² ×339/10,000	
B 上高地山岳研究所	
場所 長野県安曇郡安曇村上高地国有林 114 い林小班	9,583,808円
構造 鉄筋コンクリート造(一部木造) 1 棟 100.69 m ²	
合 計	82,303,978円

4. 図 書

種 類	摘 要	冊 数
和 書	55 年度受入冊数 242 冊	4,463冊
洋 書	" " 56 冊	1,678冊

5. 什器備品

品 名	取得年月日	取得価格	所 在
大テーブル(2台セット), チーク材 750×1200×720	48. 7.31	164,200 ^円	上高地山岳研究所
ソファセット, チーク材レザー張	48. 7.31	178,000	"
冷蔵庫, 日立 R 303 T	48. 7.30	148,500	"
テレビ, サンヨー 20-C501	48. 7.30	108,000	"
スクリプトマティック宛名印刷機, M 36	53. 2.10	265,500	事 務 所
リコービースーパードライ, SD-105	53. 2.27	158,000	"
書庫内移動書架一式, コンパクル	53. 2.10	1,500,000	図 書 室
応接セット一式, 布張イス, テーブル XLE-30	53. 8. 2	218,000	事 務 所
閲覧用テーブル (2 台), 木製	53. 9.28	250,000	図 書 室
ライティングビューロー, 木製	54. 6.23	280,300	"
テレビ, シャープ CT-2601 (寄贈品)	55. 6. 4	80,000	談 話 室
ビデオカセットレコーダー, シャープ VC 7000 (寄贈品)	55.12.27	116,000	"
合 計		3,466,500	

6. 絵 画

題 名	種類・号数	作者名	掲額, 保管場所
白 馬 岳	油A-50	中村清太郎	日本民族資料館
富 士 山 麓	油A-25	茨木猪之吉	"
田代池の白樺	油変型 6	中村清太郎	事務所(談話室)
群 猿	墨 絵	石井 鶴三	図 書 室
伊 豆 半 島	油-10	茨木猪之吉	事務所(集会室)
針 の 木 峠	油-10	茨木猪之吉	図 書 室
徳本峠から穂高連峰	墨 絵	石田 吟松	"
初冬の両神山	油-10	茨木猪之吉	"
鳥(カット原画)	墨 絵	石井 鶴三	"
メールドグラス	エッチング		"
モンブラン	"		"
後立山連峰	水 彩	中村清太郎	"
カンチェンジュンガ	エッチング	シュラギット ワイト	"
エンゲフラウ (1966 年作)	油	山里 寿男	事務所(集会室)
酒沢より北穂高	水彩-6	山里 寿男	図 書 室
槍ヶ岳初夏	油-10	中村清太郎	事務所(集会室)
カンチェンジュンガ	バステル	矢崎千代二	事務所(談話室)
北穂高滝谷	油-25	足立源一郎	"
或朝の槍ヶ岳	油-25	足立源一郎	図 書 室
北穂高岳主峰	油-25	足立源一郎	事務所(談話室)
槍ヶ岳	油-P 8	足立源一郎	上高地山岳研究所
タンボチエの僧院	水彩-4	清野 恒	事務所(集会室)
ジェルパニの親子	水彩-4	清野 恒	"

7. 刊行物・服飾品棚卸現在高

摘 要	金 額
刊行物(山岳, 山岳覆刻版等)	1,213,120円
服飾品・その他(ネクタイ・ベナント等)	1,236,080
合 計	2,449,200

(負債の部)

- 長期借入金 (未済残高) 30,413,105 円
ア 借入先 中央信託銀行株式会社本店
イ 利率 年利 8.16%
ウ 担保 事務所および図書室の建物と土地を担保として差入れる。
エ 返済年月 昭和 63 年 1 月まで
- 退職給与引当金 2,000,000 円
社団法人日本山岳会昭和 55 年度収支決算書および財産目録を監査し, 正確妥当なことを認めます。
昭和 56 年 4 月 4 日 社団法人 日本山岳会
監事 小原 勝 郎
監事 嶋 原 啓 佑

昭和 55 年度収支決算書

自昭和 55 年 4 月 1 日

至昭和 56 年 3 月 31 日

一般会計 収入の部

(単位 円)

科 目	予算額	決算額	増減(△)
基本財産運用収入	600,000	637,600	37,600
基本財産利息収入	600,000	637,600	37,600
入会金収入	2,250,000	2,880,000	630,000
入会金収入	2,250,000	2,880,000	630,000
会費収入	22,500,000	24,394,516	1,894,516
会費収入	22,500,000	23,199,594	699,594
次年度会費収入		944,922	944,922
終身会費収入		250,000	250,000
事業収入	4,930,000	5,771,872	841,872
広告料収入	1,250,000	1,396,850	146,850
山日記印税収入	380,000	560,000	180,000
その他	500,000	200,872	△ 299,128
刊行物売上収入	500,000	373,650	△ 126,350
その他事業収入	600,000	1,582,340	982,340
山研使用料収入	1,700,000	1,658,160	△ 41,840
寄付金収入		2,620,000	2,620,000
寄付金収入		2,620,000	2,620,000
雑収入	900,000	1,832,033	932,033
受取利息	600,000	1,382,832	782,832
雑収入	300,000	449,201	149,201
別途会計運用収入		710,005	710,005
図書出版研究基金収入		647,305	647,305
会員遺贈基金収入		62,700	62,700
チョモランマ登山隊保険金		3,176,560	3,176,560
チョモランマ登山隊保険金		3,176,560	3,176,560
小 計	31,180,000	42,022,586	10,842,586
前期繰越収支差額	14,408,195	14,408,195	0
前期繰越収支差額	14,408,195	14,408,195	0
合 計	45,588,195	56,430,781	10,842,586

一般会計 支出の部

(単位 円)

科 目	予算額	決算額	増減(△)
運営管理費	10,144,000	9,525,696	△ 618,304
給料・手当	4,400,000	4,024,200	△ 375,800
文具費	120,000	126,865	6,865
印刷費	600,000	658,545	58,545
旅費交通費	500,000	356,040	△ 143,960
通信運搬費	900,000	736,680	△ 163,320
火災保険料	70,000	70,600	600
営繕費	100,000	119,000	19,000

諸税会費	550,000	560,906	10,906
光熱水料	150,000	107,595	△ 42,305
電話料	250,000	285,500	35,500
会議費	100,000	135,900	35,900
交際費	200,000	231,750	31,750
什器備品費	100,000	0	△ 100,000
振替手数料	170,000	173,560	3,560
支部運営費	600,000	630,700	30,700
福利厚生費	100,000	70,364	△ 29,136
事務所管理費	600,000	586,900	△ 13,100
その他	384,000	364,000	△ 20,000
雑費	250,000	285,391	35,391
事業費	16,760,000	20,955,719	4,195,719
出版費	7,140,000	7,848,394	708,394
図書費	550,000	1,063,369	513,369
調査研究費	810,000	447,570	△ 362,430
指導費	860,000	2,165,983	1,305,983
支部関係費	900,000	695,410	△ 204,590
海外諸関係費	100,000	1,823,530	1,723,530
山研運営費	2,000,000	1,669,323	△ 330,677
その他事業費	600,000	1,888,300	1,288,300
印刷費	600,000	444,500	△ 155,500
通信運搬費	2,800,000	2,530,225	△ 269,775
光熱水料	400,000	380,015	△ 19,985
借入金返済支出	5,822,000	5,821,008	△ 992
借入金返済支出	5,822,000	5,821,008	△ 992
別途会計繰入支出		960,005	960,005
別途会計繰入支出		960,005	960,005
チョモランマ登山隊保険金		3,176,560	3,176,560
チョモランマ登山隊保険金		3,176,560	3,176,560
予備費	1,500,000	0	△ 1,500,000
予備費	1,500,000	0	△ 1,500,000
小 計	34,226,000	40,438,988	6,212,988
次期繰越収支差額	11,362,195	15,991,793	4,629,598
次期繰越収支差額	11,362,195	15,991,793	4,629,598
合 計	45,588,195	56,430,781	10,842,586

別途会計

昭和 56 年 3 月 31 日現在

(単位 円)

内 訳	前期繰越	繰入収入	取崩支出	次期繰越
終身会費積立金	3,380,000	250,000	0	3,630,000
ルーム基金積立金	652,016	0	0	652,016
図書出版研究基金	8,174,241	647,305	0	8,821,546
会員遺贈基金	1,045,000	62,700	0	1,107,700
退職給与積立金	2,000,000	0	0	2,000,000
合 計	15,251,257	960,005	0	16,211,262

昭和五十六年六月二十日発行
 102 東京都千代田区四番町五十四
 サンビュウハイツ四番町
 発行所 社団法人 日本山岳会
 編集代表 岡 沢 祐 吉
 電話東京(20) 四四三三
 振替口座東京三十四八二九番
 東京都港区赤坂一丁目三番六号
 株式会社 技 報 堂

支 部 訂 正
 八一〇一 地木誠太郎(関西)
 四三〇八 伊藤 敬一
 四八四五 三谷 忠一(56・4)
 七七一五 是行 定一(56・4)

(7P.より続く)